

蓮如上人行跡年譜

蓮如誕生 1415/2/25 蓮如 韓兼寿 幼名布袋、幸亭 誕生 応永廿二乙未 洛陽東山大谷にして蓮如上人誕生し
ましが、『期記 遺徳記 通紀』あわれなるかなわが
出所はいづくぞ 京都東山粟田口青蓮院南のほとり
はわが古郷ぞかし、御文章 文明七年 京都東山の大
谷で第七代存如上人の長子として誕生。大谷は旧字
である 谷」と「籠」の合文字の新字体で、京都東
山知恩院一帯の地名であった。一二六二年に親鸞
聖人の御遺骨をこの地に葬り一二七二年吉水の北
の辺りに改葬して廟堂を建立した。これが後の大
谷本願寺となった。現在の崇泰院の当たりである。
1419/7/23 ~ 10/18 近畿 関東 東北など大洪水。この
期間に十回もの大洪水あり 『日本災害年表』
1420 蓮如 (六才) の生母、本願寺を退出し、生国備
後鞆ノ浦 (一説に豊後望都) に帰郷 『期記 捨塵記 遺
徳記 実悟記』
1427/9/23 近畿 関東 奥羽諸国風雨、洪水 『日本災
害年表』
1428 正長の土一揆 これ以降、畿内各地で惣村を基
盤に結合を強めた農民が土一揆を起し徳政を要求す
る。永享 1429 蓮如 (十五才) 一宗興隆の志を起す 『遺
徳記』 十五歳よりはじめて真宗興行の志しきりにし
て一宗の中絶せるを前代仰せ立てられざる事を遺恨
に思ひ占しいかがしか われ一代において聖人の一
流を諸方に顕さんと常に念願したまひついに再興
したまへり』 『遺徳記』 蓮如に至るまで、本願寺
は衰微していたと言われているが、覚如・存覚時代
からの直参門徒の獲得にはじまり、覚如の大町専
修寺の掌握、善如時代の勅願寺認可、緯如による北
陸教線の橋頭堡・瑞泉寺の創建等、この頃には本願
寺の勢力が山門の注意を引くようになった。従って、
善如 緯如 功如 存如の時代に蓮如の飛躍的な展
開を可能にした基盤が建設されたと見るべきであ
る。また、近世本願寺体制の形成もまた、蓮如以
降の実如 証如 顕如の時代に負うところが多いと
言わざるを得ない。
1429 赤松満祐、播磨に国一揆起り、鎮圧のため領
国に帰る。
1430 三木通近一族、恋浜 (姫路市松原) に入る。
1431/夏 蓮如 (十七才) 青蓮院で剃髪し、広橋兼
卿の猶子となり、諱を兼寿・法名を蓮如と称す。『
期記 遺徳記 捨塵記』
1434/5 蓮如 (二十才) 教行信証延書「浄土文類聚
鈔」を書写する。父存如上人の影響化で聖教の研
鑽が始まる。継職までに諸種の聖教を書写した。現
存するものは二四点到のぼる。
1438 永享の乱
1438 頃 本願寺、両堂造営、御影堂は五間四面、
阿弥陀堂は三間四面
両堂制はこのときより始まる。一方専修寺は如来
堂 (一光三尊) と太子堂の形式をとっていたが、江
戸期に本願寺と同様の両堂制をとる。
1439/9/2 英賀性海寺破倒 『英城日記 村翁夜話
集』
1439/10/6 英賀西福寺破壊 『英城日記 村翁夜
話集』
1440/10/14 祖父巧如上人示寂、父存如上人継職、
蓮如上人二六歳
1440 三木通重、結城合戦の時、四〇隻の軍船を
率いて、飾磨沖から赤穂の警護にあたる。
嘉吉の乱 嘉吉 1441/6 嘉吉の乱、赤松満祐、幕
府に謀反、足利義教を殺害。細川、山名、武田氏
が赤松氏を討伐。以後、山名氏が播磨守護を継承。
幕府の権威は衰退し、守護大名の闘争が激化し、
応仁の乱につながる。
1441/11 赤松祐尚の死後、三木通武が飾東郡松
原郷の恋浜から入る。芝之館を建てる。『英賀日
記』
1442 蓮如 (二十八才) 第一子 順如 (河内光善寺
開基 母如了) 誕生。
1443 三木通武、英賀遷住 三木氏は伊予国河野
氏の一族で、当初浮穴氏を称したが、後讃岐三木
郡を領し三木を姓とした。『英城日記』三木氏は
武家ではなく、英賀代官の統制下にあった裕福
な交易者であり 後に武士化したと

思われる。
1444/11 三木通武、芝之館が完成。翌年正月に遷
居し諸職を改め、館内の諸役を改定する。この頃
に、英賀の三木氏の支配が確立したと思われる。
『英城日記』
1446 蓮如 (三十二才) 第二子 如慶 (常楽寺蓮
覚室 母如了) 誕生。第三子 兼鎮 (蓮乘) 越中瑞
泉寺 本泉寺兼住 母如了) 誕生。
1448 蓮如 (三十四才) 第四子 見玉 (母如了)
誕生。
1448/10/19 蓮如 (三十四才) 還相回向聞書」
を書写 (亀山本徳寺被写本原本蔵 還相回向聞書
は仏光寺第四世了海上人の著述で、亀山本徳寺
に保存されているものは、これを妙真が建武三年
十月九日に書写したものを、蓮如が書き写した
ものである。この旨を書写記録として最終頁に
奥書として書き入れている)
蓮如は二十六年間の部屋住みの時代に、主だ
った聖教を書写し、教学の研鑽に努めたことは
知られているが、その時の一つと思われる。粘
葉綴一冊 写本二十三 .0cm x 十五 .2cm 全二三
葉中現存一七葉 原表紙紺紙 別筆書入 (墨) 有
本云 建武三歳丙子十二月九日 奉書寫安置之
釈妙真」
右於寫本者 本遇寺也 江 存覚上人 之 以御自
筆本令書寫訖 干時文安五年十月十九日 於燈
下終筆功畢 蓮如」
宝徳 1449 蓮如 (三十五才) 父存如と共に北
陸布教の旅に出る。京都を出発して、東北に
まで歩を運んでいる。この巡化の詳細は明らか
ではないが、門弟も少なく大層の難儀であった
ことが推察される。道中は草鞋かけで歩行し、
足に草鞋が食込んだようすを、終生子供達に
伝えたと云われている。
1449/5/13 近畿中部でM6.5の地震。十日から
地震があり、仙洞御所傾き、洛中の堂塔・築地
の被害多く、嵯峨清涼寺の釈迦仏転倒、東山
・西山で所々地裂け。若狭街道小野長坂辺
で山崩れ、人馬の死多し。淀大橋三間、桂橋
二間落ちる。余震十八日迄に二十七~二十八、
その後七月まで続く 『日本災害年表』
1450 蓮如 (三十六才) 教行信証「脚伝鈔」を
書写する。第五子 兼祐 (蓮綱) (如賀松岡寺開
基) 誕生。
1451 道円、別車村に浄蓮寺を開基する。『
播磨国末寺帳』
享徳二 1453 蓮如 (三十九才) 「帖和讃」を
書写。第六子 寿尊 (母如了) 誕生。
1454 播磨、山城、大和に土一揆、徳政令公
布。
1454 英賀の三木通武、山名氏による英賀侵
攻の風聞があり、大規模な築城工事に着手。
南側は田井ヶ浜を城内深く引き入れて港をつ
くり、北側は十の出入口にて結び、外側は沼
沢地帯を濠 (大木之濠) とした。
康正 1455 蓮如 (四十一才) 第七子 蓮誓 (兼
兼) (如賀寺と越中中田坊開基) 誕生。蓮如
内室 如了没。
長祿 1457/6/18 存如上人遷化
蓮如継職 1457 蓮如 (四十三才) 本願寺留守
職を継職。異母弟 応玄との間に継職をめぐる
問題が生じたが、叔父如乘の尽力により第八
代を継職する。
1458 蓮如 (四十四才) 第八子 光兼 (実如) (本
願寺第九代宗主 母蓮祐) 誕生。
1459 蓮如 (四十五才) 第九子 妙宗 (母蓮祐)
誕生。
長祿真正の大飢饉 1460/7/1 近畿諸国大雨、
洪水。湖水大溢。是年以後飢饉・疫病続発し、
死者多数にのぼる 『日本災害年表』
1461/3 蓮如 (四十七才) 御文章」を初述す
る。御文章」は真宗の教えを平易な文章にし
て書かれ、主に門徒衆の面前で読み上げる形
式がとられた。以後、一四九八年まで二百数
十通を数える。寺門の大事の時に集中的に出
された。
1462 蓮如 (四十八才) 第十一子 妙如 (空 (母
蓮祐 越前興行寺蓮助室) 誕生。
1462 明石郡大久保村に光 寺を開基す 『播
磨国末寺帳』
1463 蓮如 (四十九才) 第十二子 祐心 (母蓮
祐 京都神祇伯白川資氏王室) 誕生。
1464 蓮如 (五十才) 第十三子 兼譽 (蓮淳) (母
蓮祐 近江と河内顕証寺 長島願証寺開基)
誕生。
1464/11 蓮如、本願寺継承以来下附してい
た紺地金泥無碍

光名号 帰命盡十方无碍光如来」の下附を中止する。この名号を独自に下附したことで蓮如の集団を无碍光宗と見なし、翌年比叡山の衆徒は本願寺破却に至る。
大谷本願寺破却 1465/1/9 延暦寺西塔の衆徒、大谷本願寺破却後、蓮如（五十一才）相像を奉じ金森・堅田・大津を転々とする。御真影は三井寺の南別所に小さな堂を建立し安置する。ここに天台宗末 勅願寺としての本願寺は消滅し、蓮如の企画した真宗本寺としての本願寺の創建が胎動する。これ以後、蓮如と延暦寺の確執は決定的となる（真正の法難）。
1465 浄園、龜山に長栄寺を開基す 兵庫県飾磨郡誌』
文正 1466 蓮如（五十二才）、寺務を順如に譲ろうとする（結果的には順如拒否）第十四子・了忍（母蓮祐）誕生。
応仁 1467 蓮如（五十三才）第十五子・了如（母蓮祐・越中井波瑞泉寺蓮欽室）誕生。
応仁の乱 1467-77 室町時代末期にあたる一四六七年～七七年（応仁一年 文明九年）に京都を中心に全国的規模で展開された乱。この乱では、東軍（細川勝元方）と西軍（山名持豊 宗全方）に分かれて、全国各地で、はげしい合戦が展開された。混乱は中央の政治的混乱だけではなく各地の政治的無秩序を引き起こす。仏法王法ともに破滅し諸宗ごとく絶えはてぬるを堪えず感歎「応仁記」応仁の乱収束後、混乱は地方に広がりがやがて戦国時代と云われる下克上の全国的な混乱が百年続くことになる。三木通安は西軍・山名氏の旗下に従い、大内・河野軍の先導として二十隻の軍船で摂津に出向。姫路城史上冠』
1468 蓮如（五十四才）第十六子・兼縁（蓮悟）（母蓮祐・加賀本泉寺創建）誕生。
1468 春 蓮如（五十四才）再度の東国修行
この時如光を三河に尋ね、それを縁に額田郡土呂に本宗寺の創建始まる。土呂の地は当時、京都と東国を結ぶ鎌倉街道に近く、また矢作川の水運にもめぐまれていわば水陸交通の要路にあって、前方には豊かな三河平野を望み、後ろには小高い丘陵といった、地の利を備えていた。
土呂御坊本宗寺は、その寺域きわめて広大で、東西十丁・南北八丁に及んだ。
1468/3/28 蓮如（五十四才）実如（光養丸）に讓状を書く
1468/8/21 神奈川 三重・兵庫に大風。極楽寺および寿福寺の十三重塔顛倒 『日本災害年表』
文明 1469/1 英賀において大洪水、四千余りの家破倒 『英賀日記』
1469 蓮如（五十五才）第十七子・祐心（母蓮祐・京都中山宣親室）誕生。
英賀長衆三木氏 1469-1487 三木通安、初代通近以下、四代通武までの頭首と妻のあわせて九人の墓を建て、自分の墓に北方山崎首を指定。この地は、後に（一六八一）龜山本徳寺廟所となる。英賀長衆 三木氏は英賀に安住し、上京し官位を受け、ここを拠点に交易活動を繰り広げ地域の突出した勢力となる三木通安とその三息男を四本家と云い、通安の弟、武安・広通・一武を三連家と云う。四本家は山崎家（広通）藪内家武安）町之坪家（一武）、これらを七家または七頭宰と云う。後に、七家の合議制で英賀の町を運営した。三木一族は、後に播州における本徳寺の有力な外護者になり、本願寺との関係を深める。
1471/4 上旬 蓮如（五十七才）越前吉崎に赴く
吉崎新都市出現 1471/7/27 蓮如（五十七才）吉崎に坊舎を建立 この頃から御文章が盛んに出され、文書伝道が本格化する。
1472/1 蓮如（五十八才）吉崎への諸人の群集を禁止 以後再々執行
1473/3 蓮如（五十八才）、正信偈」三帖和讃」四帖を開版する 木版刷り初版を刊行 従来、朝夕の勤行は「乳讃」が依用されていたが、この頃から「正信偈」「和讃」に改められた。本願寺宗門における初めての聖教開版となる。
1473/11 蓮如（五十九才）門徒に制誡十一ヶ条を示す

以後再々執行
1474 実如、得度 蓮如の御文章を書写する 1474/1/11 1474/10/2 龜山本徳寺蔵」
1474/3/28 吉崎の坊舎焼く 加賀一向一揆（「一向」とは現在の浄土真宗のことで当時は専念宗・無碍光宗・門徒宗と呼ばれていた）
1475/6/30 近畿諸国大風雨、洪水。前代未聞の珍事。秋に再度大風雨 『日本災害年表』
吉崎退去 1475/8/21 蓮如（六十一才）吉崎退去 小浜、丹波、摂津富田を経て河内出口に住居 教化近畿一円に及び 宏文明七年乙未八月下旬の比 予生年六十一にして越前国坂北部細呂宮郷の内吉久名の内吉崎の弊坊を俄に便船の次を悦びて海路はるかに順風をまねき一日がけにと志して若狭の小浜に舟をよせ 丹波づたいに摂津の国をとおり..」御文章「文明九年」丹波の嶮岨を通りつつ摂津国へ出でたまひ それより河内の国茨田の郡中振の郷出口の里という処に至りたまひ 幽栖をトたまう事すでに三年なりき」『實徳記』小浜に百日逗留し、その後、小浜より槇浜を通り知井坂を越えて丹波路を南下、ついで河内出口で報恩講を勤修した。御文章「三帖第十一通」その後、河内出口（大阪府枚方市）摂津富田（大阪府高槻市）溝咋を辺を中心に活動。出口・光善寺は京街道の出口であり、淀川の水運において交通の要所。また後に光善寺となる一宇の草庵は淀川河畔の葦原を埋め立てたものである。富田でも後の教行寺となる坊舎を建立した。淀川を挟んで出口と隣接し、交通の要所である。このように、吉崎から出口へ移動する三カ月の間、さらに出口、富田、溝咋での滞在期間中に、上人の伝道活動は他国にも及んだ。この時期から、播州地方へも蓮如に接触し帰依した在家信者の一部が、先導的な伝道を散発的に開始したものと思われる。若狭小浜では妙光寺に滞在近郷教化、若狭国内遠敷郡鳥羽谷山内村飛長権守が帰依。一四七五年冬の頃若狭を出て丹波（兵庫県）を通り摂津（大阪府）萩谷という山中を越えて富田に移り、しばらく逗留。
播州初期開教 1475～1500年頃 本願寺（蓮如教団）の播磨における初期布教が始まる。
空善西下以前の様子は史料も少なく、不明な点が多い。一部の史料によると播州の開拓は早く、空善の下る明応年間までに草創を伝えられている道場は十五（改宗を除く）程度を数える。西日本では仏光寺系の布教が先行しており、その関連で仏光寺系の毛坊主（道場主）の活躍が見られる。
「三木家を頼りて草庵を結ぶ。後六坊の祖となる人々来る」
「光善寺縁起」『万福寺由緒系譜略記』浄覚、播磨下向 吾是より北国に趣、汝は生国に下り播磨の衆生を化益すへし」
「光源寺縁起」誓元（万福寺）は、はじめ英賀に道場を草創（万福寺由緒系譜略記）善祐（永応寺）は、蓮如の弟子となり、赤穂坂越庄南中野に草庵を結び、延徳二年四月二十八日、方便法身尊形、明応七年四月一日、方便法身尊号下付 永応寺系譜補遺、祐全（円光寺）（摂津多田の住人）は、文明初期に英賀に道場（文明道場）を開創 円光寺縁起」文明道場は丸町（大木口と市場口の間）にあって、天正六年に竜野に移る。祐全はその名より類推して、摂津多田門徒に属する仏光寺系の僧侶であったと思われる。その後、明応年間に、空善による道場がこの付近に設置される。文明の頃は、朱英賀其余及近郷専念一向宗普弘からす」その後「啓々手を分けて化導し」船場本徳寺縁起」
明応年間までに五十余りの道場を起立し其後実如上人御連枝実円上人を請」光源寺縁起」
草創道場
応仁年間1467-1468 草創四 改宗一 計五
文明年間1469-1486 草創五 改宗十 計十五
延徳年間1489-1491 草創二 改宗二 計四
明応年間1492-1500 草創十九 改宗八 計二十七 専念道場総計五十一
西播地域では英賀と揖保川下流域と山間部平野共に街道に面して散在
東播地域では、初期草創のものは縁起から、吉崎、堺、京都等で蓮如に帰依し播磨に帰って道場を開いたと伝えられている。東播の中心は「矢川道場」 船場本徳寺縁起」

揖保川流域の中心道場は津市場の道場で、後の専称寺である。『兵庫県史第三巻』本尊は現在津市場専称寺に保存されている。この本尊は今までに五回修理されている。裏書きはすでに紛失しているが、蓮如下付である。専称寺住職1996)応仁から明応にかけて散発的に始まった播州の専念宗(浄土真宗)は明応頃までは目立った存在ではなかった。次第に地域の社会勢力として発展する段階が、一家宗寺院・英賀本徳寺の開創を契機に永正期から一気に加速してくる。実如時代、英賀御堂開創後、地域の一大勢力として成長し、既存の支配権力との抗争が歴史上に顕著なかたちを示し、以後の歴史資料の充実とともに播州の真宗史を形成することになる。このような宗教地勢の激変は蓮如教団の社会的影響力の急激な増加と連動していることは云うまでもない。

この時代の本願寺勢力の急成長は、台頭しつつあった地方勢力(国人・百姓)にお念仏の教えが広く受け入れられて云ったと云う信仰上の事実はあるが、一方で、本願寺の系列に所属していた方が有利であると言う世俗的側面も見逃せない。つまり、当時の急成長する交易者(生産と流通が十分に分離されていない)のもつネットワークが本願寺系列として確立しつつある状況は見逃せない。このような歴史的背景をもって、例えば余宗に所属する寺などでも、その構成員が本願寺系列に吸収されていったため、その寺がやむなく以前の宗義を変更せねばならない状況も当然生じてくることになる。近畿をはじめ、特に播州においては、この時期の本願寺への転派は数多く見られるが、このような事情を抱えていたと思われる。

1476 蓮如(六十二才)、堺御坊建立。

1477 蓮如(六十三才)、第十八子・妙勝(母如勝・大和願行寺勝恵室)誕生

1477 祐玄、土山村に善宗寺を開基す『播磨国末寺帳』当寺はもと「瑠璃光山薬王寺」と称し、今宿薬王山上にあった真言宗の寺院であった。祐玄が蓮如上人の弟子善宗に師事し、真宗に皈依した。土山の地に一字を建立し薬王山善宗寺と号した。『警宗寺由緒書』

1478 三木通安、入道し善海と号す。

1478/1-1483 蓮如(六十四才)山科本願寺造営をし寺基を定め、移住。一五三二年まで真宗本寺として存在する。一四八〇年に御影堂落成し大津から真影が遷座。一四八三年に寺内全ての造作完成

1480 大地震(文明十二年三月三日) 実城日記 村翁夜話集』

1480 大洪水(文明十二年三月五日)英賀城構中多く倒壊、飾万清水薬師も破却 実城記 村翁夜話集』

1480 三木通規、市庭館を建立。

1481 仏光寺・経豪、本願寺蓮如に帰参。仏光寺(後の興正寺)系の影響を受けた門徒は紀州・瀬戸内・九州・四国地方に多く、以後これらの門徒を正式に本願寺教団に帰属させる為に、本尊の正式下附が積極的に進められた。一四九三年には、紀伊国有田郡宮崎庄野村の法了に、一四九六年には安芸国蒲刈島の禅宗が真宗に転派、同じく安芸・仏護寺(仏島別院)をはじめ、この時期に開基を伝える寺がある。九州では、一四八二年に談義僧天然が蓮如に皈依し別府村道場開設、一四九五年に豊後国小倉津の動証が本尊の下附を受けている。

1482 蓮如(六十八才)、第十九子・蓮周(母宗如・越前超勝寺蓮超室)誕生。

1482/9/2 近畿諸国大風雨 『日本災害年表』

山科本願寺完成 1483 蓮如(六十九才)山科本願寺完寺地は海老名五郎左衛門(西宗寺の祖・浄乘)の寄進。遺跡は現在の山科区西野のあたり。山科本願寺が築かれると大規模な寺内町が形成され、環濠城塞都市の形態をとって繁盛した。絵師・餅屋・塩屋が軒を連ね、在家洛中と異ならず」といわれた。本願寺を中心に寺内町が形成され本寺、内寺内、外寺内はそれぞれ土居と壕で区切られた環濠城塞都市を形成していた。

1483 証誠寺・善鎮、本願寺蓮如に帰参

1483/8/29-9/17 蓮如(七十才)有馬へ湯治。この年長男順如没。

1484 蓮如(七十一才)、第二十子・蓮芸(母宗如・撰津富田・撰津名塩教行寺入寺)誕生。

1484 祐全(蓮如弟子)英賀に道場建立。(円光寺の前身)山名政豊、播磨進攻。

1484 了順、神東郡庄村に円照寺を開基す『播磨国末寺帳』

1485/3 赤松政則、山名氏を破る。

1486/1 赤松政則、山名氏を英賀に破り、さらに坂本城を攻略。

1486/9/1 近畿・東海道諸国大風雨 『日本災害年表』

長享1487 蓮如(七十四才)、第二十一子・妙祐(母蓮能・大和勝林寺・後願行寺勝恵室)誕生。

1487 大洪水(長享一年八月十日)英賀城内市庭館その他家館倒壊八十九軒 実城日記 村翁夜話集』

加賀一揆 1488/5 加賀の一向一揆、六月守護富樫政親を滅ぼす

1488/7 赤松政則、坂本の山名政豊を破り山名氏は但馬に下る。赤松氏は播磨・備前・美作での実権を回復。しかし、しばらくして、浦上氏、別所氏らが勢力を持ち、播磨は群雄割拠の時代になる。

実如継職 延徳1489/8 蓮如(七十五才)実如に寺務を譲り山科南殿に隠居

1490 蓮如(七十六才)第二十二子・兼照(実賢)(母蓮能・近江称徳寺後慈敬寺入寺)誕生。

1490 善祐、赤穂郡坂越庄中村に永応寺を開基す『播磨国末寺帳』(蓮如より本尊下附・道場開創)

1491 浄覚、飾万津郷姫路に光源寺を開基す『播磨国末寺帳』(蓮如より本尊下附・道場開創)

浄覚は、脇坂右衛門大夫常重と云う武士で、蓮如の弟子となり「粗師聖人の時に御弟子となりし大夫坊覚明の出立にさも似たり」として蓮如より法名浄覚を賜る 蓮如さんゆかりのお寺と寺室p56 脇坂弘道執筆』

明応1492 蓮如(七十八才)第二十三子・兼俊(実悟)(母蓮能・加賀願得寺入寺)誕生。

1492/6/23 近畿・東海道諸国大雨、洪水。相国寺大得院、築地門など破損 『日本災害年表』英賀の大洪水あり、八十九軒倒壊。

1492 善准、姫路に光徳寺を開基す『播磨国末寺帳』

1492 教順、揖西郡布施郷住吉村に徳行寺を開基す『播磨国末寺帳』

1492 祐願、印南郡魚崎村に延寿寺を開基す『播磨国末寺帳』

1492 祐法、揖東郡矢田部村に清光寺を開基す『播磨国末寺帳』

1492 江州浪士布施惣大夫隆観、備前隠士飽浦四郎左衛門、蓮如より六字名号下附 揖東郡君ヶ濱(吉美村)に寺庵を建立。この寺庵は一五二一年に本尊下附され西照寺となる 碧浦由来記』安積文書』

1493 錦織寺・勝恵、本願寺蓮如に帰参

英賀道場開創 1493/2/28 空善、英賀道場開創 蓮如、英賀東 駒屋道場」に本尊を授く(英賀御堂の前身)

播磨蓮如教団の発展 英賀本徳寺常住物之事」「、御本尊 明応二年二月二十八日 釈蓮如御判東かりや空善」本徳寺本尊下附 姫路船場本徳寺開基略』

空善の道場は、当初人丸町に仮に設立されたが、この時に、東苅屋(人丸町から西南方二〇〇米)に移転したことが考えられる。祐全の道場との関係は不明であるが、当時の本願寺系と仏光寺系の微妙な関係を窺うことが出来る。さらに、永正年間に本徳寺は本願寺連枝を迎え、字御坊に本格的な御堂を建立することになる。空善は、その後、英賀芝地に一字を建立し法専寺(坊)と称した。

本徳寺の開基時期 この時点を見れば本徳寺の開基年と見なす場合が多い。しかし、本来、寺の開基の特定は下附物の種類(名号、絵像本尊、木仏または寺号など)又、下附宛が個人か、地域の代表者かなどの考証を必要とし、その上特定基準も恣意的で、多くの場合明解ではない。さらに、開基を認める教団の体制と受ける側の地域の信仰集団の形成が不可欠であるが、教団の創設期にはこのいづれもが流動的であるため、開基や開創の時期の厳密な決定は、あまり重要な意味をもた

ないように思われる。むしろ寺院形成のプロセスを重視するべきであろう。特に、本徳寺の場合は、本願寺の教団側の拠点寺院であったため、末寺の形成の形態といささか事情を異にしており、播州の真宗勢力形成のプロセスから見れば、実円連枝入寺の時期が英賀御堂創建の時を以て本徳寺創設とするのが適当ではないかと思われる。

其後明応年中英賀近郷専念宗に帰依有て実如上人より釈空善「下間五郎左衛門と号す」を下英賀かりやに住」船場本徳寺縁起』

空善 本願寺第八代蓮如上人の弟子。播磨の人。同國延末の法専坊及び摂津國柱本の法光寺に住した。けれども主として本願寺の堂衆となり上人に仕えた。明応三年（一四九四）祖廟の祖忌を修するに当たり靈夢を感じて、上人は宗祖の後身であることを知り崇仰ますます篤かった。同五年九月宗祖の影像を許興せられた。上人が母を慕ふて西遊の志あるを聞き坊舎を播磨國飾磨郡英賀に造った。今の龜山の本徳寺の濫觴である。同八年三月上人の遷化に際し山科に来たりて親しく病床に侍し看護の勞を執った。後に日記一卷を造りて上人の平素の言行を伝えた。世に空善日記といひ、ついで実如上人につかえ大永五年（一五二五）実如の遺命を受けて多屋八人衆の一として空玄等と共に本廟の事に従事した。『實宗大事典』

空善は説経が達者で、英賀において多くの同行を導いたと云われている。蓮如が延徳元年（一四八九）に隠居して以降は、常随してその言行を記録して、『空善聞書』を著した。この著書は、上人に随従した人物の唯一の記録として重要であり、江戸時代に編纂された『蓮如上人御一代記聞書』の一部をなしている。

空善の西下 蓮如がある時、自分の母は西国の人であると聞いている、自分が六才の時捨てて行方知れずとなつたが、備後におられることを聞いたので、空善をたのみ播磨までなりとも下りたいと言われた。そこで空善は「はい、廻り造作など」したが、丁度兵乱が起こって蓮如は下向をはたすことができなかつた。空善は英賀の東かりやにおいて一字を建立し、寺を本徳寺と号した。『兵庫県史第三巻』

尙時は時宗が盛んで、遊行によって、情報が時宗の道場に多くもたらされていた。蓮如が耳にしたのは、京都の四条道場（時宗の道場 金蓮寺 当時時宗の四条派の本山で現在は鷹峰に移された。当時は四条大路北、東京極大路東にあつて踊り念仏で賑わつた。時宗は遊行回国で知られている）からであると伝えられている（ある時「空善記九九条の 明応七年夏より云々」と云う記事の次に記載されているため、西下したのは明応七年頃と考えられるが、下付物裏書きから見て、明応以前の可能性もある。）上人常随給仕の門弟は極めて少数であつた。常隨給仕のノ御弟トイフベキ人ハオホカラズ、報恩寺蓮宗・慶聞坊龍玄・法敬坊順誓・法専坊空善・手原幸子坊・金森ノ善徒等ノ人々」『一期記』 第八祖御物語空善聞書』アル時仰二、ワカ御身ノ御母ハ、西国ノ人ナリトキ、及候ホトニ、空善ヲタノミ、ハリママテナリトモクタリタキナリ、ワカ母ハ我身六ノ年ニステ、行キカタシラサリシニ、年ハルカ後ニ、備後ニアルヨシ四条ノ道場ヨリキコエヌ、コレニヨリテハリマヘクタリタキト、イヒケレハ、空善ハシリマハリ造作シ候ヨシ候、命アラヒトタヒクタリタキナリト仰候キ（注）四条ノ道場 時宗四条派の本山で、現在は鷹峰に移された金蓮寺で、当時は四条大路北、東京極大路東にあつて踊り念仏で賑わつた。当時時宗の道場は遊行回国でも知られるように全国の情報の集約地でもあつた。『蓮如上人一期記』ある時の仰せに、わが母は西国の人なりと聞き候ほどに、空善をたのみ播磨なりとも下りたきなり。わが母はわが六歳の時、われを捨て、行方しらずなりたまひしに、としはるかにへだたりて後に、備後国にある由、四条の道場よりきかせぬ。蓮如上人縁起』先啓了雅著 宝曆九年（一七五九） 応永二十七年十二月二十八日、御母若松の寿像をかかせて、表補絵までさせられとりたまひ、小童に対してかたりたまひけるは、願くば兒の御一代に聖人の御一流を再興したまへとて、ねんごろに心府をのべたまひ、我はここにあるべき身にあらず、我は西国備後の国のものなりとて、つれさせたまふ人もなく、ただひとし座敷のうしろの妻戸をひら

き、出でたまふと、見侍りしか。御行方しらずとなん。……備後尾道浄土寺の観音は石山の観音と、一木を以て両軀を彫刻せる靈像なり、故に備後のものなりとのたまふとなん。……」

『蓮如上人仰奈々』実悟著（一五三二～五四）蓮如上人、御母儀ハ化人ニテマシマシケリ。無疑石山觀音菩薩ニテソオハシマシケル。上人六歳ノトキニ是アルヘキ身ニアラストテ、応永廿七年十二月廿八日東山ノ御坊後ノ妻戸ヨリハシリ出給ヒカ行方シラス成給ナリ。其此上人六歳ノ寿像ヲ繪師ニ書セ表裏衣マテサセテトリ出給フ。我ハ九州豊後國ノトモト云所ノ者ナリト宣ケリ。彼所ヤ觀音ノ由緒ノ何トソ侍ラン。上人御成人ノ後二人ヲ下御尋アルケレ共、左様ノ人ユカリテハナク知タル事モナシト申ケル。其此江州石山ニハシマシマサストイベル支証明鏡ナル事ノ侍ルヲ、寺家ノ人々語りケルコソ不思議ナレ。其後カノ六歳寿像ハ石山觀音堂ノ内陣ニカカリテアリケル各申伝タル事ノ子細アリ、不思議ナリ事共也。彼御母儀ハ東山ノ御坊ニテ例式女房達ノ様ニソオハシケルト人々アヒケル。

このくだりが上人の生母の石山観音伝説となる。このようにいわゆる「言行録」には、西国の人とするなかで、九州豊国の人とするのが多く、その影響で、現在も大分県国東半島の真玉町白野に所在する本願寺派の光徳寺には「蓮如上人生母のお墓」といわれるものがある。しかし、現在、大分県の豊後国にあたる地には「とも」という地名を見いだせない。ともを重視するならば『空善聞書』における備後国鞆の浦が有力で、実際鞆の浦には、京都四条道場開基浄阿真觀の師である他阿真教によって正応三年（一二八五）に開かれた時宗の「本願寺」という寺がある。ここには蓮如生母伝説が伝えられている。

1493 等覚禅寺（観天満聖安寺）転派し本徳寺に所属

開基は等覚、明応二年、本徳寺に属きて等覚寺と称す。正徳年中（一七一三）本山より今の号を賜う。『西讃府誌』

1494 蓮如（八十才）第二十四子・兼性（実順）（河内西証寺後頭証寺入寺）誕生。

1494 空善、祖廟の祖忌に靈夢で、蓮如上人が宗祖の後身（再誕）であることを感ずる『空善記』

1495 蓮如（八十一才）第二十五子・兼繼（実孝）（大和本善寺入寺）誕生。

1495 空善、英賀に一字を建立。（法専防）

1495 浄通、赤穂郡苅屋に浄念寺を開基す 播磨国末寺帳』

1495 道法、揖西郡今市村に一行寺を開基す 播磨国末寺帳』

1495 道順、揖西郡長尾村に順正寺を開基す 播磨国末寺帳』

1495 浄西、加古郡（神崎郡）西谷村に順教寺を開基す 播磨国末寺帳』

1496 赤松政則、没以後播磨は赤松の有力家臣、浦上氏や、別所氏らを始めとする群雄割拠時代を向かえる

1496 妙法、御着村に徳証寺を開基す 播磨国末寺帳』

1496 飾東郡平野村に常称寺を開基す 播磨国末寺帳』

1496 空乗、赤穂郡下田村に明専寺を開基す 播磨国末寺帳』

1496 道味、赤穂郡池之内に長専寺を開基す 播磨国末寺帳』

1496 正順、揖西郡下揖保庄正条村に浄栄寺を開基す 播磨国末寺帳』

1496 証玄、揖東郡岩見構村に蓮生寺を開基す 播磨国末寺帳』

1496 ~ 英賀其外近郷に専念一向宗弘し、帰依之人多しといひ、道場も数多建と見えたり」『姫路船場本徳寺開基略記』明応五年より猶英賀其外近郷専修一向宗弘、帰依之人多しと云う。道場も数多建とみえたり』『円光寺縁起』

1496/2 浄信、平野村に常稱寺を開基する 兵庫県飾磨郡誌』常稱寺文書』蓮如上人と空善師に帰依した浄信が当村（平野村、現北平野）に草庵を結んで、常稱寺と号した』

1496/秋 蓮如（八十二才）隠居所として大坂に一字の坊舎を建立し始める（史料の上で「大坂」の地名初見）

宗祖影像下附 1496/9/20(11/12) 蓮如（八十二才）空善（英賀東かりや道場）に宗祖影像を授く。御免日九月二十日

御判日十一月十二日 明応五年丙辰九月廿日、御開山ノ御影様、空善二御免、中くアリカタサ申ニカキリナキコトナリ」空善聞書』英賀本徳寺常住物之事」^一、御開山御影 明応五年十一月十二日 御裏 大谷本願寺親鸞聖人」姫路船場本徳寺開基略記』明応五年丙辰十一月十八日 御うら大谷本願寺親鸞聖人御影」播磨船場本徳寺縁起 明応五年 大谷本願寺親鸞聖人御影 播磨国飾西郡 英賀東常住物也 是表補絵依古 令直之訖 右裏書者釈実円所好残留 天文十四 十一月十三日 釈証如 名古屋市中区養念寺蔵 影像裏書』(本徳寺実円によって一五四五年に表装が直されたことが証如の添書により分かる。よって、この影像が本徳寺の安置物であった可能性が高い。)

1497 蓮如 (八十三才) 第二十六子・妙宗 (母蓮能・京都常楽寺実乘 (光恵) 室) 誕生。石山坊造営 1497/11 蓮如 (八十三才) 大坂の御坊 (後の大坂本願寺) を完成させ、移住する。この大坂の坊は蓮如 名号を人の申さるるその御礼のつもりしをもって御建立の御坊なり」捨塵記』抑當國摂州東成郡生玉に莊内大坂といふ在所は往古よりいかなる約束のありけるにやさんぬる明応第五の秋下旬のころよりかりそめながらこの在所をみそめしよりすでにかたのごとく一字の坊舎を建立せしめ年はやすでに三年の星霜をへたりき」御文章・明応七年十一月 明応第五の天季秋の比、先師年齢八十二歳にして摂州東成郡生玉に莊内大坂といふ勝地を求め坊舎を建立し是を隠居所とし給へり」上人遺徳記』この時点では「石山」という名称が文献では確認できない。天正四年の顕如上人の感状に「石山合戦」とあるのみ。大坂御坊の建立は、播州をはじめ西日本への教線拡張に重要な役割を果たすことになる。

1497 浅野新五郎、前庄に万丈寺を開基する。兵庫県飾磨郡誌』播磨国末寺帳』

1497 恵門、菅生庄護持村に本誓寺を開基する。播磨国末寺帳』

1497 善徳、揖西郡岩見庄中嶋村に善徳寺を開基す 播磨国末寺帳』

1497 西念、揖西郡山津屋村に西楽寺を開基す 播磨国末寺帳』

1497 浄祐、明石郡池之村に金勝寺を開基す 播磨国末寺帳』

1497/4 蓮如 (八十三才) 医師慶道の診察をうける 蓮如寿像下附 1497/10/14(11/18) 蓮如 (八十三才) 空善 (英賀東かりや道場) に蓮如寿像を授 明応六年、十月十四日二、御寿像御免二テ、同十八日御ウラカキ大上様 (蓮如) 富田殿 (教行寺) ニアテアソハサレテ、十九日野村野村殿 (実円) 御目二入申候トコロニ...」蓮如が十月十四日、自画像を空善に「御免」し、四日後自ら裏書「御判」した。当時蓮如は富田に滞在中で、十一月二十四日大坂坊へ下向して報恩講を勤めた。蓮如寿像の「御判」は、蓮如は死没の前年の明応七年十月まで自ら行っている。真宗大谷派名古屋教区教化センター・蓮如上人研究16 蓮如上人御免、法専坊空善宛、親鸞聖人御影青木忠夫論著」明応六年丁巳十一月十八日釈蓮如八十三歳書之」

1498 蓮如 (八十四才) 第二十七子・実従 (母蓮能・河内順興寺後京都入寺) 誕生。

1498 空善、山科に至り病床の蓮如を看護する 蓮如、空善に御文章を与える。

1498 玄誓 (英賀本徳寺寺僧) 安芸元行寺に入寺 (本派・元行寺住職談)

大地震 1498/7/9 西日本太平洋側で M7.0~7.5 の地震。震域が広く 京都・奈良・熊野・三河・甲斐でも強かった。九州で屋舎倒れ、山崩れ、伊予で土地陥没、遠江で山崩れ。紀伊・三河で津波。大規模な地震であるが、震源地の推定は困難 『日本災害年表』韓国や上海で津波の記録あり (百数十年周期の南海地震)

1499 教了、揖東郡 (福井庄) 津市場村に専称寺を開基す 播磨国末寺帳』

1499/1 三木通規、飾磨薬師寺顕明に帰依 不断念仏門二入」英城日記』(一四九六年迄は英城日記に真宗の記載ナシ)

1499/2/16 蓮如 (八十五才) 空善に命じて大坂御坊内に葬所を設けさせる。『空善記』

1499/3/9 蓮如 (八十五才) 実如・蓮綱・蓮誓・蓮淳・蓮悟の五子に後事を託す。『古今独語』

1499/3/18 蓮如 (八十五才) 兄弟扶助することを遺言 『空善記』

1499/3/22 近親集り側をはなれず。『空善記』

1499/3/24 法敬、空善等、蓮如の手と足を拭く 『空善記』

蓮如没 1499/3/25正午(2/20)新暦5/14 蓮如 (八十五才) 没 (山科本願寺にて示寂・廟所は山科本願寺に造営) 二十六日火葬、二十七日捨骨



2001/03/21
真宗文化研究室